

荒魂之會九月例會資料 發表者 前川孝志
九月二十日(日) 十三時 千葉

テキスト『リグ・ヴェーダ讃歌』(岩波文庫)

一、呼称

「リグ」は「讃歌」、「ヴェーダ」は「知識」を意味してゐる。
中国語の密教經典の翻訳では「梨俱吠陀」と表記され、日本語文献でも用ゐられた事がある。

二、歴史

古代以来長らく口承され、のち文字の発達と共に編纂・文書化された数多くあるヴェーダ聖典群のうちのひとつで、最も古いといはれてゐる。伝統的なヒンドゥー教の立場ではリシ(聖者・聖仙)たちによつて感得されたものとされる。中央アジアの遊牧民であつたインド・アリア人がインドに侵入した紀元前十八世紀ころにまで遡る歌詠を含む。

紀元前十二世紀ころ、現在の形に編纂された。

三、構成

『リグ・ヴェーダ』は十のマンダラ (mandala、卷) から構成される。ひとつの巻には複数のスークタ (sukta、篇) を収録し、一篇の讃歌はいくつかの詩節 (pa) から構成される。『リグ・ヴェーダ』の特定の詩節を引用する場合は、マンダラの番号・そのマンダラ内でのスークタの通し番号、詩節番号の三つの数字を通常用ゐる。

現存する『リグ・ヴェーダ』は補遺を含めて一〇二八篇の讃歌(スークタ)から構成される。ひとつの讃歌を構成する詩節の数は三から五十八まで多様であるが、十一・十二詩節を越えるものはまれである。主なヴェーダの韻律にはトリシュトゥブ(十一音節四句)、ガーヤत्री(八音節三句)、ジャガティー(十二音節四句)があり、この三種類だけで全体の約八割に達する。

四、内容

中核となつてゐるのは二巻から七巻で、祭官家の家集的な性質を持つ。第一巻と第八巻は内容的に類似し、二巻と七巻の前後に追加された部分と考へられる。九巻はこれらとは大きく異なり、神酒ソーマに関する讃歌が独占してゐる。十巻は『リグ・ヴェーダ』の中で最も新しい部分とされる。讃歌の対象となつた神格の数は非常に多く、原則として神格相互のあひだには一定の序列や組織はなく、多数の神々は交互に最上級の賛辞を受けてゐる。しかし、他方でリグ・ヴェーダの終末期には宇宙創造に関する讃歌、ナーサッド・アーシーティア讃歌(英語: Nasadiya Sukta)、を持つにいたり、ウパニシャッド哲学の萌芽ともいふべき帰一思想が断片的に散在してゐる。

後期ヴェーダ時代(紀元前一〇〇〇年頃より紀元前六〇〇年頃まで)に続くヴェーダとして『サーマ・ヴェーダ』『ヤジュル・ヴェーダ』『アタルヴァ・ヴェーダ』の三つが編纂される。付属文典として『ブラーフマナ』(『祭儀書』)、『アーラニヤカ』(『森林書』)、『ウパニシャッド』(『奥儀書』)が著された。(ウイキペディアより)